

2008年1月18日

2007年度 大学英語教育学会（JACET）関西支部  
第3回講演会開催のお知らせ

関西支部支部長 木村博是  
大学英語教育学会関西支部事務局  
〒522-8533 彦根市八坂町2500  
滋賀県立大学 小栗裕子研究室内  
E-mail: yoguri@ice.usp.ac.jp

新春の候、会員の皆様にはますますご健勝のことと拝察いたします。  
さて、今年度の第3回講演会を下記の要領で開催したく存じます。奮ってご参加いただきますようご案内いたします。

記

**日時:** 2008年3月2日（日曜日） 16時00分-17時30分（受付は15時45分から）  
**場所:** 関西学院大学大阪梅田キャンパス  
（阪急梅田駅 茶屋町口改札口より 北へ徒歩5分）  
〒530-0013 大阪市北区茶屋町19-19 アプローチタワー14階 1408教室  
TEL : 06-6485-5611  
[http://www.kwansei.ac.jp/kg\\_hub/access/](http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/access/)

**講師:** 井狩幸男氏（大阪市立大学）

**演題:** 「脳科学からみた言語習得」

**司会:** 木村博是氏（近畿大学）

**資料代:** 会員 無料、非会員 500円

※事前申込不要。直接会場にお越しく下さい。

※お車でのご来場は、ご遠慮ください。

※講演会終了後、梅田周辺にて懇親会を予定しております。当日申し込みで結構です。  
ぜひご参加ください。

## 講演概要

言語習得研究に対し、脳科学の研究成果からどのような知見が得られ、どのように役立つのかについて、母語獲得、第二言語習得、早期英語教育等の問題を取り上げて、お話ししたいと思います。また、時間の許す範囲で、言語能力の生得性、臨界期、言語の意識的運用と自動化、注意と記憶、ワーキングメモリ、脳機能イメージングと言語研究、脳機能と言語障害の問題を取り上げお話しできればと考えています。その中から、『英語教育』1月号に書かせていただいた内容を、ここで簡単に紹介させていただきます。

脳科学の研究成果により、言語習得の考え方が変わることがあります。これに関して、少し具体的な話をします。

東北大学の犬隅典子先生は、遺伝子情報に関して、設計図のように詳しい情報が書かれているのではなく、お料理のレシピのように手順が書かれていて、材料次第で完成品は変わるという考えを示されています。この見方により、遺伝子はやわらかで、環境との相互作用の中で子どもの言語能力が育まれることがうまく説明できます。

次に、理化学研究所のヘンシュ貴雄先生は、ご自身の研究から、臨界期に関して、機能的臨界期と構造的臨界期に区別されるという見解を示されています。前者は神経回路内で起こる機能的変化で、後者は神経回路の配線の変わる構造的変化を伴います。この見解により、言語習得で取り上げられる臨界期がうまく説明できると考えられます。

最後に、小脳の研究について見てみます。最近の脳研究で、高次の情報処理に関わっていることがわかってきています。また、言語習得において、最初は意識していた活動が、徐々にあまり意識せずに行われるようになります。このことから、無意識的な言語処理に小脳の関わっている可能性が示唆されます。かつてクラッシュェンは、獲得(acquisition)と学習(learning)を区別し、言語習得は学習から獲得へ移行しないと考えました。しかし、小脳における言語処理の可能性を踏まえると、学習にも意識的な処理にとどまる場合と、無意識的な処理に移行する場合のあることがわかります。

## プロフィール

井狩 幸男 (いかりゆきお) 大阪市立大学大学院文学研究科准教授。

神戸市外国語大学大学院修士課程外国語学研究科英語学専修修了。被昇天中学校・高等学校教諭、被昇天女子短期大学専任講師、福岡大学人文学部助教授を経て、現職。

母語獲得・第二言語習得のメカニズムを心理言語学・神経言語学の観点から研究。

著書に『英語でポップ』『英語でステップ』『英語でジャンプ』(むさし書房、共著)他。高等学校用英語教科書 POLESTAR English Course I・II (数研出版) 編纂にも関わる。

論文に「記憶の発達と言語習得」(H19) 他。「神経心理言語学からみた言語発達と小学校英語への示唆」(H18. 9月) などの研究発表、「中学校・高等学校の英語教育に何が必要かー神経心理言語学からの提言ー」(H19. 7月) などの講演多数。